

学校教育における運動学の可能性

【プロフィール】

昭和44年奈良県天理市生まれ49歳。平成4年筑波大学体育専門学群卒業。平成6年筑波大学大学院体育研究科修了（修士）。平成24年10月筑波大学体育系着任。日本スポーツ運動学会常任理事。主要な研究テーマは「体育・スポーツ指導者の専門能力養成方法論の開発」。近著は、吉田武男監修／岡出美則編著（2018）『MINERVA はじめて学ぶ教科教育⑨ 初等体育科教育』（ミネルヴァ書房）の「第8章 初等体育科教育の実践②—器械運動系—」（89～101ページ）の分担執筆。

筑波大学 准教授 なかむら つよし 中村 剛



1 はじめに

編集部から「学校教育における運動学の可能性」というテーマをいただいた。しかし筆者は、学校教育全般について語るだけの知識も経験も持ち合わせていない。ここでは、「教育」という言葉を、私の専門である「体育」に読み替えて、運動学という理論が学校体育にどのようなかたちで寄与しうるのかについて述べることにしたい。

2 運動学について

運動学は「いかにして運動を発生させるのか」ということを主題とする運動理論である^(1 pp.2-6)。「人に運動を発生させること」が中心となるため、「発生論的運動学」と呼ばれる。また物体の運動とは異なる人間の主観的／主体的な運動を取り扱うため、「人間学的運動学」と呼ばれたりもする。そのため人間の運動を人体の位置移動として物の運動と同様に扱い、その客観的メカニズムを解明しようとするバイオメカニクスとは、全く異なる運動理論ということになる。

運動学では、動く人の意識や感覚（動感）など、実践的な問題が取り上げられる。それは、人に運動を発生させる上で、運動感覚的な指導（動感指導）が重要だと考えられているからにほかならない。

3 体育の役割とは

教育が「ヒトの人間化」^(5 pp.131-143)という大きな役割を担っていることは周知のことである。教育では「生理的早産」^(4 pp.60-76)により極めて無力な状態で生まれる動物種としてのヒトを、文化的で社会的な人間へと育てることが課題となる。そして体育においては、長い歴史の中で多くの人の手で築かれ、受け継がれてきたスポーツや武道、ダンスなどの運動文化を享受できる「賢い身体」を育てることが中核的な課題になると考えられる。文化的で社会的な生活の基礎は、子供たち全員に保証する必要があるから、義務教育に体育が位置付けられているのは当然のことである。

この「賢い身体」は、単に体力のある強靱な肉体と理解してはならない。激動の現代社会を生き抜いていく逞しい人間を育てる上で、子供の体力向上は確か

に重要な問題である。しかし文化的で社会的な人間を育てるには、それだけでは足りない。人類の貴重な運動文化を受容し、味わい楽しむことができるようになるには、やはり新しい動きかたを身に付けたり、既に習得した動きかたを洗練化したりできる運動能力の育成が重要となる。

4 身体知について

新しい動きかたや洗練された動きかたを身に付けるとは、自らの身体で〈動ける感じ〉を捉えることである。〈こんな感じでやればできる〉といった〈動ける感じ〉は頭で理解するものではなく、身体で会得するものだ。例えば、なわとびの二重とびを身に付けるには、二重とびが〈とべる感じ〉を身体で捉え、いつでもその感じで動けるようになる必要がある。

運動学では、この〈動ける感じ〉を身体で捉える運動能力を「身体知」と呼んでいる^(2 pp.34)。この身体知は、国語・算数・理科・社会などで教授される「科学知」とは全く別種の〈知能〉であることが明らかにされている。

5 身体知の形成における実技経験の不可欠性

それではこの身体知を育てるには、どうすればよいのだろうか。先に述べたように、〈動ける感じ〉は頭で理解するものではなく、身体で会得するものである。例えば、泳ぎかたを覚えようとするとき、水泳の技術書を読んで、その内容を頭で理解しても、実際にプールで水の抵抗や息苦しさなどを感じながら泳ぐ練習をしなければ、〈泳げる感じ〉を捉えることはできない。

このように〈動ける感じ〉を会得するには、自分の身体を使った練習が不可欠なのだが、〈動ける感じ〉を捉える身体知については、そうした練習の中で〈動ける感じ〉を会得する経験を通して磨かれていくことになる。そのため、身体知の形成にとっては、「運動ができるようになる」という実技経験は欠かすことのできないものとなるのである。

6 体育授業における教師の役割について

それでは児童生徒に「運動ができるようになる」と

いう経験を保証する上で、教師はその学習活動にどのように関わればよいのだろうか。

教師による子供の運動学習への関わり方は大きく二つに分けられる。一つは、子供たちの運動学習を計画し、その適切な学習活動を合理的に管理・運営するマネジメント指導である。

しかし授業の管理・運営がうまく行われて、子供たちの学習活動が合理化されたとしても、できるようにならない子供はどこにでもいる。そしてそうしたときに必要となるのが、教師によるもう一つの関わり方である促発指導である。なお「促発」とは、「運動の発生を促す」という意味だ。

以前、小学校のマット運動の授業を見学したことがある。その授業は、練習の仕方や技の行い方に関する豊富な資料が用意され、計画もよく練られていた。そしてなにより、児童たちが皆、熱心に練習に取り組んでいた。よくこれほどまでに子供たちが活発に活動する授業を展開できるものだと感心したくらいだ。

しかし、筆者はそこで壁倒立の練習をしている数名の児童のことが気になった。というのも、その子供たちは、何度も壁倒立に挑戦していたが、結局、授業中に一度も倒立ができなかったからである。彼らの様子を見ながら、〈動ける感じ〉を教える促発指導の必要性を痛感したことを覚えている。

当然、学校体育においてマネジメント指導は極めて重要だ。しかしそれは、あくまでも子供たちが〈動ける感じ〉を自得するのに有利な条件を用意するにすぎない。〈動ける感じ〉を探る営みそれ自体は、全て子供の自助努力に委ねられている。

一方、促発指導では、子供が〈どんな感じで動けばよいのか〉を探る営みに関わり、子供と一緒に〈動ける感じ〉を探り、その感じに出会うまで共に歩もうとすることになる。そこでは「こんな感じでやってみたらどうか」とか「ここの動きはこんな感じではないか」など、教師と子供の〈あいだ〉で豊かな対話が展開される。

体育において「できない運動ができるようになる」という経験を子供たち全員に保証するには、やはりその自得の営みを合理化するマネジメントだけでは不十分である。一生懸命に練習してもできるようにならない子供の動感世界に共感し、一緒に〈動ける感じ〉を探る促発指導がどうしても必要になるのである。

7 体育における運動学の可能性

運動学においては、子供と一緒に〈動ける感じ〉を探る促発指導の方法が体系的に解明されている。

促発指導では、まず子供が〈どんな感じで動こうとしているのか〉を把握する必要がある。そのとき教師は、自分も子供と一緒に動いているかのように、相手の動きに共感しながら、その運動を観察することになる（観察分析）^(3 pp.140-191)。

また子供の運動を見ているだけではわからない部分もあるため、子供に「ここはどんな感じなの」などと問いかけ、その動感情報を教師自身の身体に取り込む必要がある（交信分析）^(3 pp.191-200)。

このようにして収集した子供の動感情報を踏まえて、その子が〈どんな感じで動けばできるのか〉を、教師自らの身体で捉えようとする。その際、教師はイメージの中で動きながら〈子供にとっての動ける感じ〉を相手の身になって代行的に構成しようとする（代行分析）^(3 pp.202-221)。

そしてこの〈子供にとっての動ける感じ〉を踏まえることで、「こんな感じやってみたら」というように、その子に合った助言が可能となるのである（処方分析）^(3 pp.222-252)。

なお、このような促発指導は、何も目新しいものではない。それは運動ができなくて困っている子供の動きに目を凝らし、その感覚に耳を傾け、〈どうすればできるのか〉を一緒に考えながら、その子ができるようになるまで親身になって指導するという、従来からの教師の営みを、少し厳密に整理しただけのことである。

運動学は、人に運動を発生させる上で、現場の教師が普段から行っている〈子供の身になって教える〉という促発指導が、極めて重要なものであること、そしてそのような指導には、確かな理論的基礎付けがあることを明らかにしている。そしてその上で、この促発指導のための方法論を厳密なかたちで体系化しているのだ。

だからこの運動学は、日々子供たちの動感世界に寄り添い、その運動発生に腐心しておられる先生方の指導に確かな理論的根拠を与えるとともに、〈子供の身になって教える〉という相互主観的で対話的な動感指導を力強く後押しすることで、文化的で社会的な人間の育成に資する学校体育の実現に寄与する可能性を有していると言えるのである。

〈参考・引用文献〉

- 1) 金子明友：わぎの伝承，明和出版，2002
- 2) 金子明友：身体知の形成 上，明和出版，2005
- 3) 金子明友：身体知の形成 下，明和出版，2005
- 4) ポルトマン，A.：人間はどこまで動物か 一新しい人間像のために一，岩波書店，第42刷，1992
- 5) 佐藤臣彦：身体教育を哲学する，北樹出版，1993